

# "毛沢東以後"への底流— 中国の新体制を解剖する



人代開催中の1月16日、西独CSUシュトラウス  
党首と会見する毛主席 (WWP)

なかしまみわお  
東京外国語大学助教授  
**中嶋嶺雄**

「毛以後」をどう迎えるか——これが、当面中国の最大の政治課題だ。指導部内の路線対立にもかかわらず、この歴史の旋回点を意識した凝集力を支えに、ともかく新体制をまとめ上げた。一方街には「脱政治」の雰囲気が見われ、民衆は生活の向上をこそ望んでいる。

## 新指導体制の光と影

すでに多くの新聞が、特殊日本的にバナライズされた報道と解説を連日読者に送り届けてくれたけれども、中国では第四期全国人民代表大会第一回会議が、去る一月一三日から一七日まで北京で開催された。

### 毛沢東以後への体制整備

一〇年ぶりに開かれた今回の全国人民代表大会は、懸案の新憲法草案を採択するとともに、文化大革命、林彪翼変、「批林批孔」運動と相次いで曲折した政治的激動のプロセスを経て、中国がいま、ここによりやく国家指導体制の布陣を整えることができたという意味で、中華人民共和国史の重要な結節点になったとも思える画期的なものであった。そして今回の新体制の形成は、中国がいわゆる「毛沢東以後」の時代への歴史的移行期に備えるための全面的な体制整備を果たそうとしたものであったという点でも、きわめて注目すべき内容を持っている。

だが同時に、「今回の大会は団結の大会であり、勝利の大会である」(一月一

七日付「新聞公報」ことがしきりに喧伝された大会直後の旬日が過ぎ去ってみると、そこに残された不可解な謎が多くの人びとの心理の底に沈黙し始めたことも事実である。

早くも西側の誌紙は、『ニューズウィーク』(米)や『ザ・タイムズ』(英)、『星島日報』(香港)などが、そのような謎解きに「挑戦」し始めており、こうして再び中国がミステリアスな分析対象としてクロローズ・アップされようとしている。もとより、そこにはせんさく好きな西側のウォッチャーたちの性癖も露出しているが、中国自身の側にそのような謎を生む余地があったことは否めない。

その謎のうち、最も刺激的な問題は、毛沢東主席自身に関するものであり、今回の大会には、毛主席が出席した事実がないことをどう見るといった問題であろう。こうみえてくると、この問題を含めて、今回の大会には、依然としてベールに包まれた部分が多い。

### 地下道を通って参集した？代表

まず、新年早々にこのように画期的な

政治の儀式が挙行されたにもかかわらず、これまでしばしば全国人民代表大会の開催問題に言及してきた元旦恒例の三紙誌共同社説が、本年は「新年献詞」と題するその社説においてなぜこのことに全く言及しなかったのだろうか。

そして、私自身、たまたま去る一月九日から一四日まで北京に滞在していて、全国人民代表大会の開催が迫っていることについては、これをはっきり実感できなければならぬ（詳しくは拙稿「モスクワ・ウランバートル・北京」、『中央公論』七五年三月号参照）、それにしても、二八六四名もの大会代表が、連日、人民大会堂の周囲を注目していた北京の外交官や外国特派員に全く気づかれずに参集し（私見では、代表たちが、北京市内に張りめぐらされている地下道を通じて参集したことは、ほぼ間違いないように思う）、大会閉会後にはじめてその開催を知らされたこと自体も、七三年夏の中国共産党十全大会同様、多くの推測を生むこととなった。

異例といえ、大会代表の名簿が今日にいたるまでなお公表されず、議事日程の順序に従うべき重要な諸報告に先立って、周恩来総理以下の新しい国家体制の人事がまず第一に公表されたことも指摘しておくべきであろう。そして、『新聞公報』によると、二一八人の主席団のうち朱徳、董必武、宋慶齡など二三名の常務主席が、いわば第二線の長老クラスを連れて公表され、「主席台の前列にはまた、周恩来、王洪文、葉劍英、鄧小平、張春橋、許世友、華国鋒、陳永貴、陳錫聯、李先念、李徳生、姚文元、呉桂賢、蘇振華、倪志福が着席した」とされているように、きわめて複雑な人的配置がそこに示されていることである。

この前列に着席した指導者たちこそ、党の第一線を担っている中央政治局のメンバーにほかならないが、二五名の中央政治局委員・候補委員のなかでも第二線の長老格は常務主席団に移され、この一六名のみが前列に着席したのであり、しかも紀登奎、汪東興の二名の中堅的な中央政治局委員は、そこに着席せず、紀登奎は副総理に選出されたが、毛沢東側近の一人といわれる汪東興は、今回、どこにも名前が出ていない。

さらに、大会閉会後、人民解放軍の組織的再編がほぼ明らかになり、鄧小平、張春橋という今大会での中心的指導者

が、軍の総参謀長、総政治部主任を兼務するといふ、これまた異例の人事が明らかになった。

以上のような謎こそ、多くの推測を呼ぶ根拠であるが、私にとって最も印象的で重要な問題は、十全大会の王洪文報告があればど鼓吹し、「批林批孔」運動においては一つの合言葉にさえなっていた「反潮流」という言葉が、今次大会

## 移行期にふさわしい暫定性

### 党の一元的指導体制を確立

ところで、今回の新体制の大きな特徴

は、すでに報じられているように、党の一元的指導体制が党・軍・政のあらゆる分野にわたって貫徹されることになったことである。このような党の指導性の確立は、中国の「総規約であり、根本的大法である」（毛沢東）とされた新憲法の第一章総綱第二条によって明文化された。

「中国共産党は全中国人民の指導的の中核である。……マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想はわが国の思想を導く理論的基礎である」というこの条項は、中国を「プロレタリア階級独裁の社会主

の諸報告からは、全く消えてしまっていることである。

「潮流に逆らうことは、それがマルクス・レーニン主義の、一つの原則である」という毛主席の指示も、今回は全く聞かれなかった。だが、「孤立を恐れず、敢然と潮流に逆らう」ことこそ、十全大会以来の路線闘争の根本原則ではなかったのか。

義国家である」と規定した第一条とともに、新憲法の根幹をなすものであることはいうまでもない。

したがって、旧五四年憲法のように全国人民代表大会は、最高国家権力機関ではなくって、「中国共産党の指導下にある国家権力の最高機関である」（第一六条）とされるにいたった。

こうして、名実ともに中国共産党の完全な一党独裁国家になった中国においては、「中国共産党中央委員会主席が全国の武装力を統率する」（第一五条）と同時に、形式のうえでは党主席である毛沢東主席が國家の全領域をも統帥することになった。

憲法はさらに、行政面での「精兵簡政」とともに、林彪異変の教訓に学んで

軍に対する党の支配を機構上も一元化し、党主席——党中央軍事委員会——國務院国防部という指導系統がここに明確になったのである。

このようにすべてに党が優位する体制は、今回の全国人民代表大会にも具体的に反映されていた。まず大会に先立って二中全会が開かれ、大会の議題、人事が党中央によって決められたこと（この点に関する党中央の権限も憲法第一七条に明文化された）、憲法改正についての張春橋報告は党中央の委託によるものであり、周恩来総理の政府活動報告も党中央の決定に基づいて行なわれたものであることが、その反映である。

こうして、すべてが党中央、そしてそれを統帥する毛沢東主席の指導下に決定されるようになったその形式にもかかわらず、国外に流布された憲法草案には存在した国家元首の規定がなく、毛沢東個人の名が明文化されなかったことは、中国の指導部が、予想される懐疑や雑音を意識したものであると思われる以上に「毛沢東以後」の時代への一つの重要な配慮を行なったものであることは疑いない。

### 実務派官僚優位の体制

さて、このような党の一元化指導体制のもとで新たに決定された人事について

であるが、周恩来総理の留任、鄧小平副総理の二中全会における党内地位再上昇（筆頭副主席兼政治局常務委員）を伴う躍進（筆頭副総理）、いわゆる「上海グループ」のリーダーでありながら、十全大会の大会秘書長をつとめて以来、かつての鄧小平が担った党総書記的な役割を演じてきた張春橋のクローズ・アップ（憲法改正報告、第二副総理）、李先念副総理の第三副総理としての留任、喬冠華外交部長の留任などがまず目につく。

これらは注目の国防部長に葉劍英が新任し、軍からは、昨年一月の大軍区司令の異動で北京部隊司令員になった陳錫聯が副総理に新任したこと、および国家計画委員会主任の余秋里、国家基本建設委員会主任の谷牧といった経済官僚が副総理をも兼任するようになったこととともに、ほぼ予想どおりの陣容で、この点での意外性はほとんどなかったといっている。こうした人事面の配置は、毛・周体制下に鄧小平——張春橋という後継布陣を配したこととともに、きわめて順当なところであり、ここに中国は実務型の官僚体制を一律に再編成したのである。

このような実務官僚優位の新しい国家体制は、周恩来政府活動報告にも示されたように、経済建設を当面の最大の国家目標とする中国の今日の基本方向を反映するものであるが、反面、そこには依然

として重要な問題が残されている。

### 誰が毛主席を継げるか

まず第一に指摘すべきことは、党の一元化指導体制の確立によって、党主席としての毛沢東にすべての統帥権が与えられた新体制は、形式上、党主席にすべての権力が集中しているだけに、「毛沢東以後」の時代の政治権力に対する大きな不安を依然として残していることである。言い換えれば、毛沢東なきあと、制度的にはこれほどまでに権力の集中した党主席に誰が就任するのか、それにふさわしい人物が存在するのか、という問題であり、すでに周知の多くの理由から、

もしも周恩来総理がその任ではないとしたら、鄧小平、張春橋らの後継指導者がこの大権にふさわしいかという問題である。こうしてみると、新憲法は、当面の「根本的大法」であっても、かつての旧憲法がそうであったように、「毛沢東以後」の時代においては再び改訂されるか、これを形骸化する以外になく、その点で今回の新体制は、まさに「毛沢東以後」への移行期にふさわしい暫定性を帯びざるをえないように思われる。

今回の新体制においては、いわゆる集団指導体制は、実質的にはともかく、形

のうえで実現していない。そしてすべての長老政治家が再びなんらかの意味でポストを占めざるをえなかったように、中国の最高リーダーシップにおける後継者問題と「シェロントクラシー（老人指導型の体制）」の問題は「老・壮・青」三結合の鼓吹にもかかわらず、こうしてなお未解決だといえよう。

### 「反潮流」をつぶした疑集力

第二に注目すべき問題は、すでにみた「反潮流」の消滅とともに、いわゆる文革ラディカルないしは急進的イデオロギと見られた「反潮流」グループが、新しい国家体制のなかで主要な地位を担っていないと思われることである。この点については、王洪文、江青、李德生、姚文元、汪東興らの党中央政治局のメンバーが、党の一元化指導体制の確立にもかかわらず、国家体制においていかなる地位をも占めなかったことが象徴的にそれを物語っており、汪東興が全く名前を消していたことについてはすでに触れた。

もっとも、この点については、新任副総理の大半と國務院の新任部長・主任の大半が文革グループであるうえに、呉徳が大会秘書長をつとめ、紀登奎とともに副総理兼任の董國鋒は内政の要ともいえる公安部長を握り、文化部長には「智取

威虎山」などの革命機軸劇の作曲者として知られる于会泳が江青女史の期待を担って就任するなど、文革派が樞要を占めているとの見方も、香港、台湾筋に根強いようであるが、全体として実務派グループの壁はやはり厚かったのである。

「批林批孔」運動では、「反潮流」とも「反復辟」（反復活）が叫ばれたにもかかわらず、鄧小平をはじめ、谷牧・副総理兼国家基本建設委员会主任、方毅・対外経済連絡部長、王静・第四機械工業部長、李成芳・第五機械工業部長、康世恩・石油化学工業部長、万里・鉄道部長、葉飛・交通部長、張勳天・財政部長、周崇鑫・教育部長らの國務院指導者や人民法院院長に新任した江華、人民解放軍総後勤部長就任の張宗遜など、楊成武・元総参謀長、余立金・元空軍司令官ら一連の軍首脳の復権とともに、文革期に激しく批判され、一時は姿を消していた旧幹

部の大量「復辟」が、いまや大きな「潮流」でさえある感は否めない。

このように、党の一元化指導体制というタテ軸に対して、実務派官僚体制というヨコの厚い体制の存在は、中国内政にとって一つの深刻な矛盾であるようにも思われ、今後の推移をみつめねばなるまい。いづれにせよ、中国リーダーシップ内部の路線闘争は、「毛沢東以後」の時代

## 消え去る「政治第一」

### 街頭にあふれる「脱政治」

このような時期にたまたま訪中するところできた私が北京で見いだした現実

きさであった。

前回の私の訪中は一九六六年秋であり、文化大革命の激動期であったので、その変化の大きさがよりあざやかに感じられたのかもしれないが、「批林批孔」運動については、中国の公式紙誌を讀んでいて感ずるイメージとは全く異なっており、

それが広範な大衆運動として高揚している状況をついに見いだすことができなかった。

もとより、「批林批孔」運動に関する文献や小冊子は、新華書店をのぞいてみても、きわめて多種多様であったが、その論調はますます瑣末主義ないしはスコラ哲学的なものになっており、この運動が幹部と知識分子を対象とした思想・イデオロギー・キャンペーンになりつつあることが歴然とする。一方、街頭には、「脱政治」の雰囲気があふれており、すべてが平穏化して、民衆は生活の着

実な向上にこそ関心があるようだ。ともかく、民衆の生活実態における「脱政治」傾向と権力の上層における壮大な政治的ドラマとのギャップには驚かざるをえない。

この点で、八年ぶりの北京は、市場や商店なども商品がきわめて豊富になり、

# つくろ

ただつくるのではなく

真に人間のための環境づくりを

西松は

創造とよんでいます

西松建設

都市には自動車、農村には耕耘機がふえ、市民の衣服や自転車が新しくきれいなものになっているなど、その変化を即座に実感できる。周恩来総理が政府活動報告のなかで、「八億の人民の衣食に対する基本的需要が保証された」と指摘した点は、私の実感ともなら矛盾しな

問題は住であり、また国民経済全体の水準の向上であり、工業化の発展である。この点に関しては、中国がまだまだ大きく遅れていること、まさに中国の主張どおり発展途上国であることは、北京の目抜き通りを一步はいった胡同や盛り場でもたちどころに感じられることである。

こうした実感からしても、中国では政治よりも経済の時代が着実に開幕しているように思われ、今回の新しい体制は、そのような時代の要請に応えようとするものであったといえよう。時代の要請ともいえるこのような「潮流」に逆らうことができなかつたところに「反潮流」運動の挫折があつたのではなからうか。

「批林批孔」運動も、当初の政治的性情を大きく変質させて今日にいたつてい

文書に含まれていた毛沢東「専制暴君としての秦始皇、毛沢東「孔孟の道を歩む者とのイメージを転換するためにこそ、まず揚秦運動による始皇帝像の転換、毛主席こそ孔子批判者であることを示す批孔運動として「批林批孔」運動が開始され、昨年前半の壁新聞再出現までは、そこに明らかな周恩来批判も含意され、同時に、「批林批孔」運動にかこつけた毛沢東側近体制批判も交錯した（その代表は、七月三日付『光明日報』の回收事件であつた）。

しかし、ほぼ昨年秋以降、曲折したこの運動の変質とともに戦線の収束と再団結が鼓吹され、今日に至つたように思われる。

### 疑問多い「毛自己批判」説

では、今回のような「反潮流」の消滅は、毛沢東の全人代欠席、文革急進派の退潮傾向にも関連して毛沢東主席自身の権威の低下を直接に意味するのだからか。この点では、北京で感じられる毛沢東イメージと外部世界でのそれとの間にギャップがありすぎるように思われる。私は今回、一月二〇日のテレビでマルタ共和国のミントフ首相と会見した毛沢東主席の姿を八年ぶりに見た。率直に

であつたが、北京で感じられる限り、依然として毛沢東をたたえる舞台装置が多すぎるためか、その老齢化が毛沢東のカリスマの権威の後退を意味する兆候は全くなかつた。むしろ、老齢化に伴う行政的・実務的指導能力の当然の低下を補填しつつ「毛沢東以後」の時代への移行にそなえようとする体制が、今回ようやく

確立したと見るべきであるように思われ、この点からすれば、毛主席の全人代欠席は、それほど驚くべきことではないような気がする。むしろ、中央ヒナ壇に大きく飾られた毛沢東の肖像を前に多くの指導者が「毛沢東以後」の時代への深刻な認識のもとに団結を誓ひあつたと見ることができよう。

香港で昨年末から伝えられていた毛沢東の三七項目の「自己批判」という情報に依拠した毛沢東の権威低下説は、『ニューズウィーク』（一月六日号、一月二七日号、三月三日号）がそれを伝えて、多くの波紋を投じている。だが、今のところそれは「香港情報」の域を出るものではないようだ。むしろ、問題があつたとすれば、「批林批孔」運動に関連した軍内部における李德生問題であるように思われ、李德生の地位低下は、そのことを示しているのかもしれない。この点は、汪東興の退潮や文革急進派の推移とともに注目されるであろう。鄧小平が

総参謀長に、張春橋が総政治部主任に就任して、軍の諸問題をも行政的に指導することになった背景は、あるいは、このような軍内部の動向に関連するのかもしれない。

### 中国の新たな試練

いずれにせよ、中国はいま「毛沢東体制下の非毛沢東化」への底流の上に、「毛沢東以後」の時代へ向けて、いよいよ本格的な歩みを開始した。このような歩みは、米中接近、日中国交をもたらしした潮流とともに、いまや抗しがたいものである。むしろ、中国は、今後、国際社会との交流の拡大もたらす「外圧」に耐えつつ、この移行期を経過せねばならないという歴史的な課題にいよいよ本格的に直面するであろう。

今回の周恩来報告が示したように、対外的にはすでに評価の定まつた既定路線を中国は当面歩み続けるであろうが、その将来には、毛・周両首脳の問題も含めて、なお多くの曲折がある。だがその曲折がどのようなものであるにせよ、「政治第一」の熱狂的社会は、すでに過去のいまわしい残像となりつつあるように思われ、中国の民衆自身は、この試練の時期を冷静に経過することを強く望んでいるように思われる。